

## イスタンブール四方山話

飯尾彰敏  
イスタンブール市都市交通計画調査団

昨年の10月から11月にかけて1ヵ月半、イスタンブール市都市交通調査団の一員としてイスタンブールに滞在した。このときが私にとってはトルコもイスタンブールも初めての滞在となった。これまで、外からは何度かトルコを見、トルコを読み、トルコ文化を体験していたので本家はどんなものかと興味津々でイスタンブールへやってきた。雑学的だがイスタンブールやトルコについて気になったこと、記憶に残っていることなどを紹介してみたい。

## フォトジェニックなイスタンブール



(wiki)

イスタンブールは摩訶不思議な地形であり、「アジアとヨーロッパの接点」と形容されるとおり、上の画像のように黒海(上部)とマルマラ海(下部)を結ぶボスポラス海峡に面し(左側がヨーロッパ、右側がアジア側)、マルマラ海からはダーダネルス海峡を通してエーゲ海と結ばれている。そのため古くから交通の要衝として栄えた。

このボスポラス海峡、ヨーロッパとアジアの接点を地理的な数値で見ると、約30kmの長さがあり、最も幅が狭いところで750m(RumelihisariとAnadoluhisari)、最も広いところで3.7km(北部)ある。深さは、36.5mから124mだ。

「イスタンブールは坂が多い」の一言に尽きる。これは悪い意味でない。坂が多いと視野と視角が多様化するため街がとて魅力的になる。私の方程式では、歴史・文化＋坂＋水面＝フォトジェニックな美貌都市、となる。イスタンブールはまさしく世界の中でもフォトジェニックな都市の代表格である。

## イスタンブールの名の由来

その昔、ビザンティオン Bizantion、次いでコンスタンティノポリス Constantinopolis と呼ばれていた。紀元前658年、古代ギリシアのビザス Byzas という人がこの地に入植

し、Byzas にちなんでビザンティオンと命名したと言われている。「ビザンティウム」はそのラテン語読みである。

その後、2世紀末、ローマ帝国の支配がこの地にも及び、西暦330年にはローマ皇帝コンスタンティヌス帝がビザンティウムを新都と定めた。そして、遷都以来、この町はコンスタンティノポリス、つまり「コンスタンティヌス帝の都市」と呼ばれるようになる。1453年、メフメット2世率いるオスマン・トルコ軍がコンスタンティノポリスを陥落させ、その影響下に入ってからイスタンブールと変わったようだ。しかしイスタンブールの名が正式に用いられるようになったのはオスマン・トルコ帝国滅亡後の1930年(独立は1923年)からである。

ではその間はどうだったのだろうか。日本での歴史的記述では、コンスタンティノポリスが陥落してからイスタンブールになったというのが通例であるが、トルコ語ではイスラムが広がったという意味の Islambol で表現されたり、アラビア語やペルシャ語では、Asitane-i Saadet(幸福の宮居)、Ümm-i Dünya(世界の母)、Darü's-Saltanat(王権の館)等と様々な呼ばれかたをしていた。信頼できそうなのが貨幣などの刻印に使われたコンスタンティノイェ(オスマン語)が正式ではないだろうか。

イスタンブールの語源は諸説あるが、東ローマ帝国時代からスラブ人が旧市街を指して呼んでいたスタンプルという地名がトルコ人にも取り入れられたものともされている。この名前は、一説にはギリシャ語の“eis stin poli”(都市に)から取られ、ギリシャ人がコンスタンティノポリスを「都市の中の都市」と呼んだことに由来するという。あるいは、Constantinopolis が詰まった stanpol を語源とする説がある。また、トルコ語の「Islam イスラム」と「bul 都市」が合成されて「イスタンブール＝イスラム教徒の町」となったという説も聞く。

## ボスポラス海峡の名の由来

こちらも諸説ある。Byzas 以来約850年ギリシア植民市として栄えたことから、「ボスポラス海峡」はギリシア風の地名という説だ。ボスポラス海峡は、「雌牛の渡し場」という意味で、これは、ゼウスが妻ヘラの嫉妬から逃がすために恋人のイオを雌牛に変身させてこの海峡を渡らせた、というギリシア神話に基づいている。

もう一つの説は、紀元前3世紀まで反映した現在のウクライナ、黒海沿岸南部にあった古代ギリシアの植民地「ボスポラス王国(Cimmerian Bosphorus)」に由来する説で、この海峡を通過してボスポラス王国へ繋がることからその名が付いたとも言われている。

## イスタンブールの発音

イスタンブール、日本語では「イスタンブール」と表記されるが、標準トルコ語の発音では最後の音節は長母音化されないで、発音により忠実に「イスタンブル」と表記されることも多い。もともと、トルコ語の口語では母音調和化して、日本語ネイティブには「ウスタンブル」と聞き取れるような発音になることも多いようだ。これは次回確認してみようと思っている。

## “Bosporus”か、それとも“Bosphorus”なのか？

ボスポラス海峡の英文表記には The Bosphorus strait と The Bosphorus Strait の二通りがあるが、どちらが正式なのかというところや前者の“Bosporus”に軍配があるよう

だ。ちなみにボスポラス海峡大橋は“The Bosphorus Bridge”(1973年に竣工)と表記されている。この関係ははっきりしないが著名な英国人技師(Sir Gilbert Roberts)が設計を担当している。ボスポラス第2橋はFatih Sultan Bridgeという。

#### 文学でのイスタンブール

「憂愁」に満ちたこの街-イスタンブールと表現したのは2006年にノーベル文学賞を受賞したトルコ人作家オルハン・パムクだ。これは、オスマン・トルコの首都であったイスタンブールの栄華とその後の没落を表しているのではと想像している。「イスタンブール-思い出とこの町」は自伝的な内容でイスタンブールが記されている。代表作には「私の名は紅」、「雪」、「白い城」等があり邦訳も出ている。

歴史小説といえば塩野七生の「コンスタンティノープルの陥落」はイスタンブールを訪れる人は概ね読んでいることだろう。アガサ・クリスティの「オリент急行殺人事件」などイスタンブールは歴史的な題材や小説のモチーフを数々提供している。

近年の作品では、16世紀に消えた赤いイズニック・マイルと津和野を結びつけた恋愛小説「イスタンブールの闇」や古代遺跡エフェソスを舞台にした運命的な人生を描いた「エフェソスの白恋」(両方とも高樹のぶ子著)がある。「イスタンブールの闇」ではスルタナメット地区やプリンスズ・アイランドが、「エフェソスの白恋」では題名になっている古代エフェソス遺跡が描かれており、トルコを知る上でも興味深い。

#### 映画に登場したイスタンブール

映画についても然り、フォトジェニックな都市は映画にも当然似合う。例がやや古いショーン・コネリー演じるジェームス・ボンドが活躍する007シリーズ、「ロシアより愛をこめて」(1964年4月公開)ではイスタンブールの映像が前半を占める。英国海外情報局のトルコ支局長・ケリム(ペドロ・アルメンダリス)から暗号解読器(レクター)を手土産にしたソ連情報員タチアナ(ダニエラ・ピアンキ)の亡命要請を受けたボンドはパンアメリカン航空でYesilkoy空港(イスタンブール空港)に到着する。ケリムに案内されイスタンブール地下貯水池(地下宮殿)に潜望鏡のような仕掛けがあり、どういうわけかソ連領事館の中が覗け、罨である美貌のタチアナが見える。ソ連領事館(現ロシア領事館)は、ペラ地区イスティクラル通りにあるのでどうもおかしいがそれは映画の世界だ。

ボンドは、ボスポラス海峡クルーズ船の上でタチアナからレクターの情報を聞き出し、アヤ・ソフィアでタチアナが持ち出したソ連領事館の平面図を入手する。ケリムがボンドを連れて行った村のシーンは、イスタンブールのアジア側郊外にあるペンディク(Pendik)だ。そして、ボンドは、シルケジ駅からタチアナとオリент急行に乗り、ベオグラード、ザグレブへ向かう。

ここまでがイスタンブールを舞台にしているが、映画に登場したイスタンブールは現在もそのままタチアナの美貌同様辿ることができるであろう。

#### 本家トルコ料理

分家トルコ料理はブルガリアやシリアで何度か食べたことがあり、本家の料理はどんなものなのかと興味を持っていた。周辺諸国であるレバノン・シリアやブルガリアでは美

味しい料理はトルコ料理のメニューかその影響を強く受けた料理だった。

一説にはレバノン・シリア料理は宗主国がフランスだったので美味しいという説があるが、フランスの影響は否定しないが私はトルコの影響の表れではないだろうかと思う。エジプトを例にとると、英国が宗主国だったので不味いとか、なんとなく納得してしまいそうだが、エジプトの不味さはトルコからの距離がレバノン・シリアより遠いのでオスマン・トルコの支配下にあったものの食文化は差ほど浸透しなかったのではとも考える。逆にコーヒーはエジプトからオスマン・トルコへ伝わった経緯がある。

ブルガリア料理はケバブツェ(ひき肉料理)とヨーグルトを多く使うのが特徴だ。これはバルカン半島全域で共通のようだ。カヴァルマ(陶器のポットで肉と野菜を煮込んだ料理)はブルガリアの代表的な料理だが本家にもあるし、シリアにもあった。ということはトルコの影響なのだろうかと推測している。

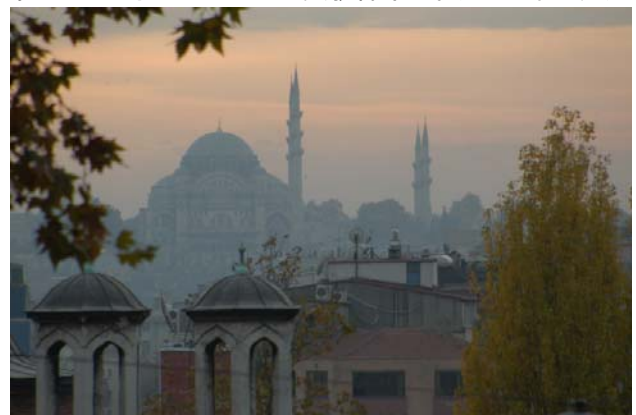
さて、本家の味はサンプルがロカンタばかりでは批評できるレベルにないが本家的には非常に満足している。

#### ウィナーコーヒーとオスマン・トルコ

日本でウィナーコーヒーというと、生クリームかホイップクリームがやや濃いコーヒーの上に浮かび、シナモンパウダーがトッピングしてある、若しくはシナモンスティックが付いているものを指す。実はウィナーコーヒーというコーヒーはウィーンにはないが、ミルクの泡をのせたコーヒーをメランジェ(Melange)やホイップクリームをのせたフランツィスカナー(Franziskaner)がある。これらがウィナーコーヒーに近い。

さて、ウィナーコーヒーの起源はというと1683年、オスマン・トルコ軍がウィーンを包囲した(第2次)時に起因する。ウィーン市民は城砦内に立て籠もり、包囲は結果失敗しオスマン軍は退却した。ウィーンの街を危機から救ったフランツ・コルシツキーがオスマン・トルコ軍の遺留品である“kahve”(緑のコーヒー豆を挽いたもの)を基にカフェを開店し好評を博した。これがウィナーコーヒーの元祖であり、オスマン・トルコなくしてウィナーコーヒーなしというわけである。

記憶の範囲で綴ったイスタンブール、サンプル数は多くはないが、外からでも美味、内からはさらに美味というのが私のトルコ滞在の印象である。今年も出張するので新たなトルコの発見を楽しみにしている。魅力満載のイスタンブール、いやイスタンブールだろう、更に掘り下げてみたい衝動に駆られるフォトジェニックな美貌都市だ。(2008年3月)



(晩秋の黄昏時、ペラ地区よりスルタナメット地区を望む)